明治三十一年十二月廿六日遞信省第三種郵便物認可
明治三十五年四月一日發行（毎月二回〔一日、十五日〕發行）

(一)

保管濟

佛教時報

第七十六號

目次

社說
總選擧に就て……
社會說
總選擧に對する吾人の所懷……柴田常惠
◎總選擧に對する準備◎改良の聲◎佛敎青年會春季大會◎山口佛敎青年會◎監獄改良の一端◎敎界彙報◎紛々錄
雜錄
先德餘香（其十二）……（文學士）本多高陽
獨乙より……（文學士）近角常觀
つまらぬ記……劍虹
信界
比叡山上の青年……曉烏敏
今昔
前田利家（四）……百目木劍虹
會報
會頭久我侯爵巡回日誌

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第七十五號目次

社說論說
◎迷信勦絶論……（安藤鐵腸）
◎貧民窟の宗教……（鎭屯漢）
◎住職養生の專門學校を起すの必要……（山崎白英）
◎政黨改造說◎第十六議會◎女子教育と私立學校◎當今學生の讀物◎佛教青年會慈善音樂會◎紛々錄◎教界彙報……（自稱籌士）

雜錄
◎放言……（楠鷗浦）
◎佛教辨士の評判……（百目木劍虹）
◎佛陀の感化……
◎前田利家……

信書

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし
東京市本郷森川町一番地

廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

明治三十五年三月廿一日印刷
明治三十五年四月一日發行

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

發行兼編輯人 百目木智璉
印刷人 清水朝太郎

政教時報

總選擧に就て

第十六議會閉會を告げ、現代議士の任期も先づ無事に終へなる相ふとなりしより、總選擧準備も一段の活氣を帶び來れり、候補者談選擧話は新聞紙の一半を埋むるに至れり、是より同志打も始まるべく、黃金は一層其色澤を增すべく、暴力亦意外に効果を奏すべき、殺風景なる汚濁なる穢土を現ずるに至るを恐るゝなり、此間に處する我同盟會員の態度は抑如何かあるべき、我同盟會や決して安心談や御相續話のみを爲す爲の會合にあらず、積局的に社會改善の任に當る覺悟あることは、綱領已に之を明記し、其政治に關し、政黨に對する意見の如きは、本誌毎々之を唱說公論せる所なれば、其平生社會改善を叫ぶ責務に對しても、又其平日懷抱せる政治上の意見に對しても、立憲政治上に於ける最大事件たる總選擧に對して、一定の主義と態度と無かるべからず、世間或は政教淆亂等を名として批難を加ふる者あるべしと雖も、斯る抽象的空論によりて世事は動かさるべきものにあらず、思へ我同盟會の如き、全國到る處に支部若くは連絡會を有し、幾萬の會員を有する大會にありては、其會員の一半は一面に於ては我同盟會員にして、他の一面に於ては、亦政黨員政治家たるものなり、去れば著しかの政教分離なぞいふ一種の空論に聞き、おぢして、政治界に跳躍することを忌避すべしとせんか、我會員の一半は平日身は佛教家なり、同盟會員たるを忘れ、品位も德操も忘却して、只管選擧騷ぎの渦中に捲き込まれ、魚市に入りたるが如く、臭を覺ねざるに至らば、我同盟會は却て池魚の禍を受くるに至るや必せり、茲に至て始めて臍を嚙むとも及ぶべからざるのみ、去れば何れの點より考ふるも總選擧の如き大事件に關しては、豫其め主義と態度とを講究し置くべき必要に迫られ居るなり、

從來の例に徵する時は、總選擧の間際には暴行恐迫も行はれ、卑劣なる人權賣買をも頓着なく實行せらるゝなり、其他種々の手段に由りて、社會を腐蝕せしむること莫大なれば、我同盟會は平生の主義と自信とに對して、防腐劑たる覺悟を有せざるべからず、

我同盟會員にして自ら候補者となり逐鹿場裡に馳騁する人士もあるべし、又敢て自ら候補者たらずと雖も、斯る公共事務には熱心奔走する人もあるべし、是等の人に切望する所は、黃白を行使して人權を賣買するが如き卑劣手段をば斷じて採用すべからざること、或は腕力を藉りて暴行以て選擧人の自由意志を妨ぐるが如きは又勵して爲すべからざるなり、其他は類推すべく、一々枚擧すべからず、

然れども從來の非行は當に候補者のみを責むべからず、選擧人の腐氣も亦之を招けるなり、選擧の時に於ては僅少なる目前の利益に眩惑して、候補者の人物の高下、其主義德操の如何をも考へず、選擧を切りにして、後に於て代議士の節操

等を議するは抑誤れり、其種子を選擇せずして、徒らに禾穀の美にして且饒ならんを希ふは、痴人の夢と一般なり、我同盟會員たるものは斯る痴呆漢の行爲に陷るべからず、必ず目前の小利に迷はず、鑑力に屈せず、選擧の初に愼重に愼重を加へて、候補者の選擇に於て悔を殘すべからず、

此他我同盟會員として注意すべきは、議員の一資格として宗教界の事情に通じ、且佛教に對して献身的に盡瘁すべき人物を選擧せざるべからず、彼宗教法案は一たび第十四議會に於て否決せられしと雖も、之を西歐の實例に徵し、之を我國の現狀に照すに、今後一兩年間に於て、必ず議院の卓上に見るべきは、余輩の豫言するに憚らざる所なり、思へ三百八十餘人の代議士はありと雖も、可否の決する所は掛りて一票の多寡にあり、若し選擧當時に於て、此點に注意を加ふる時は第十四議會當時の如く、騷擾狼狽せずして、安じて議員諸氏に一任し置くを得るなり、況や佛教徒の關係を有するや決して宗教法案のみに止まるにあらず、宗教法一度制定せらるれば、之に關聯して諸種の法令の制定せらるべきは火を見るよりも明なり、其都度第十四議會當時の如く選擧區民の憂慮と奔走とを要する如きは、選擧區民も其煩に堪へざるのみならず、抑亦代議政の本旨に違へり、加之余輩は已に佛教を仰信し、佛教徒と標榜する上は、佛教熱心家を擧げて代議士たらしむるを以て、國利民福ありと斷信し、無宗教者若くは異教徒を以て此榮職を充たしむるは、當然余輩の採るべき道にあらざるを覺悟せざるべからず、是本會が決して總選擧を輕々に看過すべからざる所以なり、

本會の採る主義態度は概ね右の如し、余輩又政府政黨等に對して希望なき能はず、從來政府は總選擧毎に取締法を訓令すと雖も、嚴然中正を守りて之を厲行し得るものは未だ有らざるのみならず、中には大に選擧干渉の非行をさへ敢てせし内閣もありき、然れども今回の總選擧に關しては現内閣は斷然嚴正中立を保ち、選擧取締を厲行し得べき位置に立てり、加之選擧法も改正せられ、選擧の好模範を示すべき時期なれば、現内閣は何處までも腰を强くして、好果を收めんことを希望す、然る時は吾人は日英同盟締約と同し程度を以て、現内閣に謳歌せんなり、

政友會は伊藤侯が憲政有終の大希望に對し、模範政黨樹立の目的を以て起りしは、其宣言に明にして三尺の童子と雖も知る所なり、然れども其實狀は決して、かの宣言書を實現するものにあらず、隨て政友會の行動は總裁侯爵の意に滿たざるや明なり、これ蓋し旣成政黨と、從來の代議士を基礎としたるより生じたる弊といふべし、總裁侯爵は之を知らざるにあらずと雖も、政黨の中堅たるべき代議士を一新すべき機會を有せざりしを以て、今日まで陰忍せしなるべし、今回の總選擧は、かの宣言書を實にし、總裁侯の大抱負を實行するには得易からざる好機なり、徒らに代議士の數を貪らずして、健全なる眞の選良を以て充たし、以て所謂模範政黨を實現せしめられんことを希望するなり、

進步黨は兩三年來、少數黨として逆境に沈淪せる最中なり、

言ふまでも無けれど、少數黨の據りて以て楯とする所は、唯正と理とあるのみ、或は權略術數等を用ゐれば、寧ろ逆境に深入せんのみ、買收暴行等は固より黨の爲に謀りても禁物なり、又何程アセリたりとて、議院の過半數は勿論、政友會を凌ぐ程の代議士を得ることも出來ざるべければ、寧ろ謹愼の態度を取るの勝れるに如かざるべし、總理伯の明、余輩の苦言を甘受せられんことを切望す。

帝國黨は今や順境に在るか、將た逆境に在るか余輩之を知らず、何れにしても斯る少數黨にては、矢張權數を弄せんより寧ろ正義と公道とに據りて、天下の同情を惹かんに如かず、若し夫れ政府も政黨も余輩の希望を空うせざらんに於ては、社政の郭情期して待つべきなり、今年の總選擧の一事社會改善の一着步たらしむるに望なきにあらざるなり、願くは余輩の言をして一種の樂天觀たるを笑はしむる勿れ、

論說

總選擧に對する吾人の所懷

柴田常惠

昨年末來時事問題として最も多く世の注意を惹き、今にして尙ほ喧すしきものは來らんとする總選擧の候補談なり、日英同盟の事件や、國家經濟の問題や、一時人心を動し都鄙を騷がせしと雖も、此等の事旣に一段の解決を得、餘す所は實行の方面にして永く論議の好題目たるに適せず、殊に議會開會以後三百の代議士袖を列ねて地方に去り、候補の運動に着手してより一層その熱を高めて、幾分の才識あるもの多少の聲望あるもの族々として起り、視聽盡く此に集りて新聞紙は之が爲に幾段の紙面を割くを辭せず、五六の人相會すれば談必ず此に及び、彼は某地を根據として旣に運動に着手せり、此は野心あり形勢を觀望して將に起んとす、某も動くべし否某は之を他に讓れりと、紛々擾々また甚だしと云つべし、之を聞く候補者として競爭場裡に輸贏を決せんとする人殆んど五千に及ぶと、而してうの選はるべきは三百八十餘、候補者の十の一に達せず、諺に云ふ婿八人に嫁一人と、うの穫得を爭ふもの豈たゞ嫁のみならんや、

總選擧の期は尙數月の後にあり、然も競爭の熱度は旣に高まり來りぬ、若それ時期の漸く切迫するあらんか、或は彼我共に狂して理を說くも耳に入るなからん、未だその甚しからざる時に於て吾人が所懷を吐露し、旣に競爭場裡に起てるもの又は將に起たんとして計畫を廻らすもの、及び選擧の權を有する人に對し、豫め多少の注意を促すの敢て無用の事ならざるを信ず、

忌憚なく吾人の所懷を語らんか、所謂代議士なるものに對し多くの價値を置て重視するものにあらず、固より代議士は國民を代表して立法の議に參する名譽と重責を並び荷へるを知らざるにあらず、議院制度が立憲治下に於て政治運用の妙を極むる機關たるを知らざるにあらず、然も吾人をして議會

を輕んじ議員を重んせざるに至らしめたるもの、其罪實に代議士諸君の行動と選擧者諸士の失態に基く、

激する勿れこれ蔽ふべからざる事實なり、代議士諸君が議會に於ける行動は、果して能く國民の輿望に從ひ國利民福の增長に盡して其職責を全ふしたるか、漠々として利害を判するの明なく、漂々として確立不動の主義を有する能はす、否必すしも主義と識見を備へざるにあらす、然れどもその主義は黃金崇拜なり、その識見は利を射るの明あり、此の如き主義と識見を以て議會に望む、奚んぞ以て國運の進渉に資するあらんや、一會は一會より腐敗の度を高め醜聲天下に偏く妖氛抑ゆる能はす、議員は縱情私慾の臭穢となり議會は利益爭奪の討議場と化し去るもの實に宜なり、議會開設以來此に十有餘年見來れば成し得たる所たゞ代議士の歲費を二千金に增せしのみ、而して弊の此に至りしものこれ選擧者諸君が些少の贈賄に心を動かし或は不用意にも人物を察せずして妄りに選擧し、その監督を怠りしに由る、即ち我議院制度の第一期をして殆んど失敗に歸せしめ、心あるものをして憂懼措く能はす議員を卑しみ議會を輕んじ、激して政黨撲滅の聲となり憲法中止の說となるもの、代議士諸君の行動を選擧人諸士の失態に基くと云はずして何ぞ、

今の所謂代議士が尊敬の値なきは當然の事たり、然れども彼等は參政の權を有しその行動國家の消長に關かる少からざるを思はゞ、之を輕んじ抛擲して顧ざる如きは忍び能はざる所、須らく代議士をしてその重責を全ふしその名譽を荷ふに至らしめざるべからず、事を計るはその始めにあり源泉澄まずんば末流清きを得ず、議員をして其責を全ふし議會をしてその功を擧げしめんとせば、豫め議員選擧の際に當り周到なる用意を以て之に望むべし、敗德腐腸の輩を撰んで後その汚行を慨する如きは愚と云はざるべからず、吾人が總選擧に際し苦言を敢てする意また之に外ならざるなり、

知らず五千に及ぶと稱せらるゝ多數の候補者は、果して議員の重職を辱めずその責に堪ゆるの資望を備ふる人なりや、若それ然りとせば當代人物の欠乏を訴ふる如きは極めて意味なき言ならんも、不幸にして事實は之を否定し、中に一代の師表として德望高き偉人あり、敬虔眞摯なる氣銳の好紳士ありと雖も、その數鮮少にして多くは之れ一時の功名心に驅られ、學識なく主義なき徒が金錢の力に依て僥倖を祈るにあらずんば、政治を商とし議員を以て職業とせる恒產なき賤々の輩のみ、此等の人物に依り組織されんとする次期議會は、能く面目を新にし廓清の實を擧くる望あるか、

代議士たらんとする動機が正義の擁護者たり、國民意志の發表者たるの故にあらずして、凡俗の尊敬を羨み揚々たる形容を欲するにある如きは、根底に於て既に過つものなりと雖も、世事多く理想の如きは少し、豈獨り多きゞ代議士にのみ求めんや、幸に其人にして適當の學識と訓練を具へしめば、甚しく議員の職を辱むるなからんも、彼等の多くは國政に參するに足る學識なく、從て一定の主義政見を有するなし、加ふるに精神的訓練極めて弱く艱難に處して迷はざる不動の信念なし、此故に一度困難なる問題顯れんか取捨の判斷に苦んで譎詐の辨に惑ひ多少の黃白に動き易し、口腹の欲に迷はざらんは哲人も尙難しとする所、その度を重ぬるに從ひ遂に黃白を欲する念强まり、自ら進で贈賄を求め主義を賣りて恥ぶきに至るは滔々皆之なり、議員を職とし政治を業とする所謂政黨員に至つては、吾人の言を待たずして世既にこの弊を知る、恒產なき浮浪の徒いかで恒心あるべけん、彼等は二千の歲費と不正の所欲を目的として議員たらんとする外何等の抱負を有せざるなり、決議權の賣買は初めより彼等の期する所にして、黃白の爲には如何なるものも犧牲とするに躊躇せざるなり、總選擧後の帝國議會も此の如き徒によりて奚んぞ廓清の實を効し得べき、

（未完）

社會

總選擧の準備

怠慢なゝ議會は無事閉會を告げ、議員の任期も無事終了しぬ、來る八月を以て議員總選擧は行はれんとす、現代議士は無論の事新に候補者として打て出てんとする三百八十餘名の定員たる代議士の候補者は全國を通して三千以上五千人位なるべしとは昨今新紙上の傳ふる所あり、總選擧間際に至らば如何に競爭の激烈なるかを豫想するに難からざるべし、

新選擧法は大選擧區單記法を採用したるを以て從來の地盤に動搖を來すことは爭ふべからざる事實にして從て再選すべき代議士は從來と雖も三分の一に過ざりしか、今回の新選擧法により尙一層減少を見るならんとは一般の認むる所なるが如し、此を以て各政黨派は方針一定せざるを以て、各自勝手次第の自薦候補者多く同者打は到底免れざる事ならん、」

村會議員選擧に迄賄賂行便の現狀なれば、代議士選擧の時は尙更にして此か爲め社會の腐敗は愈ゝ烈しく、濁れる政界は一層濁波を見るに至らん、總選擧の準備とは候補者の選定にあらずして、黃金の準備、徧驅走政略の準備なるを思へば轉た寒心の至りに堪へざるなり

希は我各地の同盟會は別項社說にも論したるか如く、賄賂行使する不德なる議員を選出せずして、宗敎的頭腦ある信念の固き淸淨なる良議員を擧げられんこと余輩の切に望む所なり、總選擧準備に就ては重ねて論することあるべし

改良の聲

敎界到處改良の聲を聞ざるはなし、說敎の改良、葬儀の改良、寺院の改良、此等の改良洵に時勢上適切なる改良に相違なかるべし、改良强ち不贊成にあらず、然れども說敎や葬式や、寺院等は幾百年來の習慣因襲によりて今日迄經來れるもの、今一朝にして之を改めんこと容易の業にあらず、强て之を改めんと欲せば角を矯めて牛を殺すの恐れなきにあらず、殊に改良の實を擧げんには一人や二人の能く遂行し得る所ならん

や、必ず多數の同意者を求めざるべからず、即ち團体の勢力を藉らざるべからず、團体にして、鞏固なる以上は改良の實を擧ぐること輕々たるのみ、各地所在の我同盟會は敎界刷新の手段として、是等布敎上に於ける儀式等時勢に順應する方針を以て改良せられんことを希望す、本會綱領第九條に

敎界の組織及儀式をして時勢に順應せしむること

の一個條を加へたるは以上の微意に外ならざるなり、余輩は各地を巡回して屢〻是等の事を耳にして竊に地方有志諸君も亦此意あるを喜ぶものなり、敢て一言を記すること此の如し

佛敎青年會春季大會

大日本佛後青年會にては去月廿三日午後一時上野三宜亭にて春期大會を開會せしが、折り惡しく雨天にて寒氣も甚しかりし爲め、來會者僅に廿餘名なりし、席定まるや幹事和田鼎氏昨年度の決算報告と共に、今年の夏期講習會は美濃國養老に於て開會すること、來る八月より巡回講演を開くこと等を協議し了りて、昨年來清國遊羅等を漫遊してこの程歸朝したる柏原文太郎氏の遊羅佛敎談等ありて午後四時散會したりと云ふ

山口佛敎青年會

山口佛敎青年會は、山口高等學校内に遊學する學生諸氏か發起者となり、敎授諸氏之か補佐となりて組織したる佛敎の團体にして、今春はしめて誕生したる也、各地高等學校内に佛敎青年會の設立を見るも、獨り山口高等學校のみこれなきは吾人の常に遺憾に思ふ所なりしか、今其設立の報道に接して大に祝せざるべからず、左に趣意書を掲けて江湖に紹介せん、希は長へに健在に發達せられんことを望む

山口高等學校内佛敎青年會設立の主旨

我佛敎青年會は何故に起りたるか曰く時勢の必要は吾人を驅りて此に至らしめたり回想するに明治の鼎革すでに三十五年を經過したり之を内にしては制度文物擦然として具はり禮樂敎化の道また其宜きを得之を外にしては列國と玉帛樽俎の間に折衝禦侮の道を講じて以て東洋の牛耳を執る眞に是れ光を前烈に紹ぎて謀を後昆に貽すの時なり豈吾人青年の如き者にして高行危言以て特に世人の視聽を聳動することを要せんや然れども吾人の不肖なる中心窮に未だ安んぜざる者あり以爲へらく其制度文物といひ禮樂敎化といふも恐くは是れ外形末法の整備に非るか其實質の道全しといふも是れまた一時の假裝に非るか之を要するに内は敗絮にして外は金玉とは今日の謂ひに非るか何を以てしか言ふ他なし正精神的方面に於て闕如する所あればなり

夫れ簡人に於て精神の貴重なるが如く社會はた國家に於ても亦精神的方面の貴重なるや論を要せず過分なる肉體快樂の簡人を衰弱せしむること猶偏頗なる物質的文明の發達の社會を腐敗せしむるが如し是を以て社稷百年の大計を謀する者は宜首として意を風敎に注かざるはなし人或ばこれを以て迂闊にして時務に通ぜざる者となさむも過去の事實は實に古人の確固たる證明者たり羅馬帝國は何故に滅亡したるか德川幕府は何故に政權を失墜したるか皆其精神的方面の腐敗に因らざるはなし然るに顧へりて今日我國の狀況を觀察せよ如何なる精神的文明の以て人心を維持し世道を指導すべき者あるか神道は如何僅かに我國家組織の餘隆によりて殘喘を呼吸し其末流は淫祠邪敎に陷りたるに非ずや儒敎は如何其社會に力りる勢力は未た侮るべからざる者ありと雖も正範圍狹少にして退そきては一國の人民を

感化し進みては世界の人類を救濟すること能はざるに非ずや武士道の如き或は心學の如きも社會制度の解体と興に或は人智の進歩と興に今や半は已に歴史上の事實と化し去らんとす然則我同胞は將に何を以て自己の精神を鍛錬し國家の元氣を涵養せんと欲するか老年者は舊來の惰力によりて猶或は其不滿足を感ぜざるべきも吾人青年に在りては此際果して如何なる立脚地を占むべきやなるか試みに爾等に問はむ君は神道を信ずるか曰く神道の如きは吾その如何なる敎理と如何なる發達をなせしかを知らず然らば問はむ君は儒敎を信ずるか曰く唯かに論孟の字義訓詁を習誦せしに過きず且又漢字は已に普通敎育上より日々疎外せらるゝ者なれば如何ぞ其眞理を究むるを得んやと如此にして以て武士道心學の類に及ぶも皆大同小異の答を得ざるなし然らは則方今の青年は何等の理想なく人生に對して何等の趣味もなくたゞ醉生夢死して草木と擇ふことなきと謂ふも可なり人或は視して曰く生を明治の奎運に享けたるは實に千載の一遇なりと吾人も實に如はしかく信じたりき然れども今にして之を思へば其最大不幸を生まずんはあらず何となれば人生の貴とむべきは肉體的快樂を得るにあらず爵位榮祿の榮譽を博するにあらず一て實に精神的安慰を得て其理想を實現するにあればなり

然れども天幸に未だ吾人を捨てざるなり暗黑の裡自ら一道の光明を認めたり佛敎及基督敎即是れなり此二宗敎は俱に宇宙の眞理に則とりて人生の公道に其根抵を有する者なり世界の宗敎其數頗る多しと雖も其幽玄高尚に於ては此二敎に及ぶ者なし吾人はこれに依りて其心神的飢渴を慰し以て修養鍛錬に資せんと欲す此二敎の同きこと如此し然らば何爲そ吾人は耶蘇敎を捨てゝ獨り佛敎を取り以て佛敎青年會なる者を組織せしか乞ふ少く其理由を明にせん

第一　人は佛敎を信仰する者なり是れ固より第一の理由にして且又最も要重なる者なれども此外尚一二の所論なきにあらず一は佛敎と我國との歴史的關係にして一は佛敎の多面的にして包容の資料頗る多きに因るなり抑々佛敎は本と是れ外敎なれば基督敎と同等の擇ぶ所なけれども其の我國に入りし以來すでに一千有餘年その初めに當りては或は我國固有の民情と衝突扞格なきに非りしも今や已に十分に和合して殆んど一種の國敎の如き觀あり吾人の制度及び道德と密接の關係あるは著明なる事實にして之を基督敎の未だ我國と同化すること淺きに比すれば自ら日を同ふしく語るべからざる者あり是を以て此二敎は我國現今の精神的飢渴に對して同く靈藥たらむも今その何れを用ふべきかを問はゞ先つ佛敎を取らざるを得ず譬へは同一の疾病なるに投藥は其人によりて異なるが如く又平生使用し來りたる器物の便利なるか如く又親友の襟腕を披きて談話し易きが如し是れ吾人の彼を捨てゝ此を取りたる所以なり夫れ然り是を以て吾人は敢て基督敎を憎惡し排斥する者に非らず同く是れ人道の一端眞理の斷片なれば公平なる態度を以て相提携し以て天地の公道を明にし以て人類の救濟を計劃せんと欲する者なり（未完）

監獄改良の一端

從來監獄内の囚人には或種の書類を限り讀書せしめ來り、之を外にしては休息日に敎誨師の說敎あるのみにて、毫も智德を開發せしむべき機關の設備はなかりしが、當局者間には獄内の當該官をして一種の書籍を講義し、智育幷に德化の具に供せしむべしとの意見を懷き居るもの尠なからざりしが、近來各地方監獄に於ても之が實行を試むるものあり、其方法は獄内受持の看守をして娯樂の間に智識と道德との觀念を養成せしむべき、普通讀書の講讀を爲さしめ、又醫師をして衛生講話を試みしむる等なるも、昨今にては講義に充つべき良好の書籍に乏しきを一缺點とす、併し從來感情の疎隔し居れる囚人と當該官吏との間に一脈の情趣を通じ自ら囚人をして看守に信賴するの念を生じ出獄後に及ぼす感化にも影響をる所多く其成蹟頗る見るべきものありといてとなり

敎界彙報

◎近角常觀氏の歸朝　同氏は池山榮吉氏と共に去る廿四日長崎に着、同廿六日神戸着、同日京都に入りたる筈なり、神

戸上陸の際左の書面を寄せらる

拝啓、先月十二日伯林出發海上無事唯今歸朝上陸仕候、不在中萬事御盡力爲法奉深謝候、手を握りて舊懷を披くを得ん事を樂み居り申候、只今土屋、蕪城、出雲路、葦原、乘杉、奈倉諸兄と面晤して歡談久濶を叙し候、先は不取敢御報知申上度如此候頓首

三月廿六日

◎圖館佛教青年會　同會は函館別院輪番、及武宮張氏等の主唱にかゝり去月十六日盛大なる發會式を擧行したる由、同會の重もなる目的を擧くれば如左

第一條　本會ノ目的ハ佛教ヲ學ビテ各自ノ心性ヲ磨キ社會ノ道德ト青年ノ氣風ヲ進ムルニアリ

第二條　本會ハ前條ノ目的ヲ達セン爲メ左ノ方法ヲ行フ

一　春秋二期ニ大會ヲ開ク四月、十月

一　毎月講話會又ハ演說會ヲ開ク

一　有益ナル書類ヲ出版シ又ハ配布ス

一　書籍及新聞雜誌ノ縱覽所ヲ設ク

一　慈善救濟ノ爲メ適宜ノ方法ヲ設ケ又ハ臨時ニ集會ヲ開ク

一　公共ノ利益ヲ圖ル爲メ諸種ノ運動又ハ設計ヲナス

一　時々ノ報告ヲ配布ス

◎本會々頭以下去月廿四月北陸巡回を了へて無事歸京したり

◎本月中旬頃より九州地方を巡回さるゝ豫定なれども未だ確定せず

◎例年の如く大日本佛教青年會にては本月八日釋尊降誕會を執行する由、大隈伯に一席の出演を請はんとて目下交渉中

◎凍死者追弔會　近江彦根町高等婦人佛教示讀會にては、會員相謀りて第八團第五聯隊凍死者の追弔法會を覺みる會長伊藤照氏弔辭を朗讀し次て七八十名の婦人會員一同靖國に勤行をなし了りて演說會を開きたる由

紛々錄

◎維新以來立派になつたものは種々あるが、石塔などもその一つであらう、試みに開敎の折は墓所へ行つて見玉へ、維新以前の石塔は粗末なものであるが、近年建てられたのはその石材もその製作も勝れたものである

◎この現象は敢て東京計りではない都鄙皆然りだ、その此に至つたものは文化の發達と共に工作も進んだ故であらうが、虛榮を競ひ華奢を衒ふに由ることを忘てはなるまいと思ふ、

◎死者を祭るに禮の厚きは願ふる稱すべきことであるが、親鸞のが立派だから劣らぬ樣に、隣家のよりほちと勝る樣にと苦しう思ひして唯々名聞を旨として石塔の大且奢ならんことを欲する計りであるは餘り感心も出來ない

◎全体日本人は昔から紀念と云ふことには在りして居つたらしい、後代に傳ふべき文字がない時には名代の長を書き、また墳墓なども甲々莊大に營まれた、

◎併し之は決して一般でない、中流以下のものは著しき墳墓も營まなんだと見へる、墓所に必ず石塔を建つる事になつたのは切支丹禁止の結果であつて、餘り古い話ではない、その以前は庶民などを建てるは極めて少かつた、證據に古い石塔の在るのは稀である、

◎少しは古いものがある關東及び西國地方の板碑だとか、或は諸方に散在して居る五輪形寶篋院形などあるが之は至て少く、あるも大抵は鎌倉前後殊に戰國時代のものだ、

雜錄

先德餘香（其十二）

高陽生

◎大道院義順贈嗣講　は美濃國養老郡大牧村知通寺の先代である、此人の一生は擬講で終られたが、學德が勝れて居たといふので、過般嗣講を追贈せられた、此嗣講は平日俗談巷話にも、漢語を用ふる習癖が有て、世人より漢語燈といふ異名を付けられて居た、或る時入浴した所が、餘り熱つ過ぎたから、水を命じ樣として、例の漢語で、下婢よ下婢よ冷水を持ち來れと言はれた、併しこれでは下女には其意味が理解せられまいといふことに氣が付て、冷水とは冷かな水と訓ずるぞやと云はれた、面白い話では無いか、

◎圓山院靜觀嗣講は　尾張海東郡佐依木村信力寺の前住である、昨年七月頃に死去せられた、師は正定院制心嗣講の高弟で有て、宗乘に精しく、又倶舍が得意で有たといふことである、併し學術よりは寧ろ德行の高た人で、一生妻帶せずして、而も清名など立てられたことは勿論無い、此頃に至りて、生前師に歸依して居た門信徒等が、師の命日には必墓參をするので一層賑合ふと聞いて居る、全体尾張地方は、眞宗では墳墓も作らぬが通例で有て、墓參といふことは、父母の命日でもせぬのである、然るに師の爲に墓參者の多いといふのは、其高德の程も察せられる、又師に就て一の逸話を聞いて居る、今より二十年程も前の事でもあらう、師は名古屋に或る妓樓に招待せられて、藝妓や娼妓のみを相手にして說敎をさせられた、其時師の隨行は二人ありて、何れも說敎の上手な人達で有たが、前席に出て說敎を始めると、從前曾て御說敎なぞ聞いたことの無い連中であるから、クス〳〵クス〳〵と笑て始末にをへ無い、ソコデ平生得意に辯じ立てる辯者達も、二人とも大失敗で、閉口して下て來た、最後に嗣講が出席せられたので、二人は師匠も急度シクジラレルに違無いぞと言て聞て居ると、其讃題（演說で言へば演題に當る）が「藝者商賣ほとけの暮し、花や線香で日を經てる」といのふで有て、夫から色々世間の面白き說話などして、終に眞宗一途の安心談をもシツクリ聞かせて、高坐を下られた、この手際には二人の隨行もアツト斗り驚いて、流石は師匠である、學問の有る人には叶はぬと言て感歎した、

◎雲溪院講師　本名は南條神興と言て、越前國南條郡金粕村臆念寺の前住で、今の南條文雄博士の養父である、今日大谷派などの狀況を見ると、學者といふ者は至て勢力の無い者で事務役員等の鼻息を窺ふやら、又役員等に顧使せられるやら隨分情け無い連中が多い、維新前に在ては講者の勢力などは非常なもので見識の高かつた者である、維新前から引續き講師で有た、香山院は勿論其位置を保つたのであるが、其後に學者の見識を持ち位置を辱め無た人は、先此神興師で有うか、ソウいふ人でも又無我な所が面白い、晩年說敎をとられるに付て、大抵何處でも同一の說敎をせられる、隨行が其說敎を悉く覺ゑて前席に之を辯ずる、師匠は其事を知て居らるゝか否かは知らぬが、後に出て亦其通りな同し說敎を平氣でせられる、夫でも參聽者は先生は又格別ぢやとて有り難がつて聞たものである、

◎洞觀と雲溪　明治の初年頃に在て、此兩師は東本願等に於て異彩を放た人である、洞觀師は筑後入性寺住職で、慶應二年已に擬講となり、後本山が講師職を廢して學師號のみにした時分には、二等學師に成た人で、雲溪師は豊前光蓮寺住職で學歴は洞觀師と略ぼ同じで、明治六年嗣講となり、十八年示寂せらるゝや、直に講師を贈賜せられた人である、院號は

龍華院と呼ぶ、越智洞觀、蓮井雲溪兩人共に無我恬淡な學者で、實に氣品の高い珍しい人々である、曾て洞觀師が破れた汚れた袈裟衣を着して、腐た樣な藁草履を穿いて、雲溪師の寺を訪問せられたが、生憎雲溪師は不在である、雲溪さんは居るのかと尋ねると取次に出た下婢は乞食防主と思ひ、輕蔑の口調で旦那樣は今御留守だよと答へた、ソーカ己等は腹がすいたから飯を振舞て呉れと言はれた、下女は愈乞食坊主に違ひなしと思ひ、冷へた麥飯と餘た香物とを出した、洞觀師は夫を十分食して、雲溪公が歸たら宜敷申して呉れとて立ち去られた、雲溪師歸院の時下女がコーいふ乞食坊主が來たと告げたら師はァ、ソラ洞觀だ洞觀と言たのみで、他の言句なし、

◎洞觀と千巖　千巖とは細川千巖師で、大谷派では學者で事務に參りて、一時は立つ鳥も落したものである、明治四年で有たが、此千巖師が始めて擬講を拜命して、鬼の首でも取た樣な氣になり、意氣揚々として從者を連れて歸國すると、向ふから冷飯草履を穿いて蔽れたような衣を着た坊樣が、オーヲ千巖か貴公此頃擬講に成たソーなが、善かった〳〵、精々勉強するが善いぞと、言ひ終て去る、これは言ふまでも無い洞觀師である、

◎又明治初年教部省より官吏を遣して、教導職の試驗をしたものだ、其時小栗憲一師が九州を巡回して此試驗をした、洞觀師は　枕（憲一師の籍名）が檢査をするし、　枕が檢査をするとて大聲に叫んで居て、遂に受け無つた、又其後本山寺務所より學師の辭令書を渡された時、俗僧共にコンナ辭令書貰ひ度無いとて、受取らず其儘國に歸られた、

獨逸より

（教友諸兄に呈す）

西暦一千九百二年二月四日早曉四時夢寤む、突如として父母の慈訓を回憶し、翻て一昨春已降西遊の經過を追懷し感慨止むべからざるものあり、既にして感謝の念油然として起り横臥に堪へざるものあり、乃ち盥嗽謹みて大經を拜誦す、且つ以爲、此の如き深遠微妙の念を起したることなし、今にして筆を採りて其感を描かずんば亦何の時か其期なからんと、而して時正に登校時間に迫る、乃ち校に登りて歸り忽ち歸朝命令の電報に接す、回顧せば米、英、佛、獨、墺、匈、和蘭、白耳義、諸國の諸教を視察して、人事匆々の間二星霜を經たり、今や思想圓熟して益佳境に入るの時、此命に接す、因緣洵に不可思議也と、西遊二歳今獨都伯林を去りて、羅馬の舊都を一瞥し將に東歸の途に上らんとするの（二月十一日夜）前夜、諸親友予を助けて行裝を整へ歸りし後、孤燈影下俯仰感慨に堪へず、座側小照をとりて感を記し教友諸兄に呈す

獨乙帝國伯林市に於て　近角　常觀

つまらぬ記

（巡遊餘錄）

劍虹生

◎今尚一行中の笑柄となるものは、余の岡崎にて下駄を失ひ出發の時間切迫せる爲め、麻裏草履をひつかけしまゝ桑名に至りて履物を新調して以來到處下駄を大事にしたる爲め、一行より常に下駄の要鎮はよきかとて東海道筋巡遊を了る迄翻弄の種となりぬ、併し僕よりも失策せしは高陽兄なり

◎これも岡崎の事なり、東京出發の際あはて込みしと見ね、肝心の名刺を忘れ岡崎にて印刷を頼みしに、學士號と姓名丈は麗々しく二號活字にて刷り上げられたり、高陽兄いたく困却の体なりしか、爾來之を使用するに當り一々説明の勞を取られたるは御苦勞千萬の事なりし

◎一行中曹洞宗の布教師城井一秀氏あり、脫俗の風中々すてかたき所あり、氏の經驗談は一行をして談笑を催さしむるに頗る妙を得たるものあり

◎北陸巡遊中よく準備の整頓せしは小松と羽咋か第一等ならん、玆に可笑しき事は一行の福井別院に到りて將に下車せんとするや、車夫賃金を請求して止まず、はては荷物を差押る抔如何に辨明するも頑として聞きいれず、一行の大辯士もこれにはほと〻閉口しぬ

◎余の七尾より一行に分れて獨り飯田に赴くや、無聊いふべからず、演説會の開かれたるは午後四時半にして地方有志二三の演説ありて余の演壇に立ちし頃は六時過なるを以て、暮色既に至り聽衆の顏を辨ずること能はず、燈の用意やなかりけん、余は初めて暗中の演説を試みぬ、盲者の演説も斯くやと思はれぬ、後方よりそろ〳〵聽衆は立ち去るの樣子なり、張り合抜けて氣のみあせり、自分なから何をいふて居るやら感覺全く失せ演説は途に龍頭蛇尾に流れたるこそ是非なけれ能州界隈まで態々恥晒らしに行たまゝな感念起りぬ、翌朝還へりに下等切符を貰ふて下等滊船に乘り込みたるも亦一興なりし

（つゞく）

信界

比叡山上の青年

（求道の精神の一節）

曉鳥敏

平安朝に於ける佛教の改革者は誰であるかと問ふたならば、誰でも先つ指を屈するのは、我か傳教大師其人であらう。今日の淨土宗、融通念佛宗、時宗、禪宗、日蓮宗、眞宗か總て叡山より、流れたことを思へは、我國の佛教史上に於ける傳教大師の位置は、印度佛教に於ける龍樹の地位を有すると云ふて差支はない。この傳教大師か、安立の地を得られた、求道者としての事蹟は大なる教訓を示して居る。

大師は近江の人で、稱德天皇の神護景雲元年に生れ、年十二才にして、南都大安寺の行表に就て出家した。其後華嚴法

相の教儀を極むれども、どうも安心の道が得られない。而もこの世の無常を感し、自己の罪悪に嘆くの念、大に芽し、ヒつとしては居られなくなり、法華經一部を懷ろにして、獨り天風吹きすさぶ比叡の峯に登り、道得られずんは山を降らずとの決心を以て心を專らにし、眞に安立を求むるの心を以て『法華經』を讀むこと二年、一夜月清き時、忽然として空中の聲をきゝ、茲に始めて安立の道を發見し、延暦七年其山頂に一乘止觀院を建立し、盛んに大道の宣布に盡しました。

大師の傳記を見ると、大師十九才の時、斷然決心して、猿鳴き、狼吠ゆる四明山上に『法華經』を翫味するに至つた時の、師の心緒を書いてある。則ち次の如くである。

「悠々たる三界、純ら苦にして安きことなく、擾々たる四生唯患へて樂まざるなり牟尼の日久しく隱れて、慈尊の月未だ照さず、三災の危きに近く、五濁の深きに沈む。加のみならず、風命保ちがたく、露體消え易し、草堂樂みなしと雖も、然も充少白骨を散らす、土室閑く迢はしと雖も、而も貴賤魂魄を爭ひ宿す。彼を見て己を省みるに、此理必定せり。仙未だ服せず、遊魄留めがたし、命運未だ得ず、死辰何か定めむ。生ける時善を爲さずんば、死せる日獄の薪とならむ、得難くしてそれ移り易きは人身なり。發し難くして忘れ易きは善心なり。……伏して己か人跡を尋ね思ふに、無戒にして竊かに四時の勢をうけ、愚痴にして四生の怨となる。……是に於て、愚が中の極愚、狂が中の極狂、摩禿の有情、底下の最澄、上は諸佛に違し、中は皇法に背き、下は孝禮に缺けり。(叡岳大師傳)

この切なる思ひによつて起されたのが大師か求道の精神であつて。之を讀んで、私が尤も感ずるのは、大師自ら「愚中の極愚、狂中の極狂、摩禿の有情、底下の最證」と云はれたのである。これで世の求道者は知らねばならぬ。世の宗教を求むる人の多くは、世の無常を感じ、人身の多苦を感じて然るやうであるが、大底この自己の罪惡觀が出來ないやうである。即ち達摩大師が神光に云はれたやうに、輕心慢心にして大道を得ることの出來ないのが多い。信仰の内は頭の高い人ではくゝることが出來ませぬ。自分はつゝらぬ〳〵見るかげもなく、取りもなく、どうすることもできぬ徒ら書かりと知らずして、信仰の内にはいらうと思ふて居る人は、切符を持たずして滊車に乘らうとし、大平洋を渡ぎずして亞米利加に行かうとすると同じく、到底だめなことである。

世の信仰を求めて得られないと嘆く人よ、顧みて自分は頭が高くはないか、輕心がないか、慢心がないか、ゆ檢査して見なくてはあらぬ。「佛說無量壽經」の中には

「憍慢と懈怠とは以て此の法を信し難し」と敎えられてあるから見れば、信仰を求むる人は第一に勤勉でなければならず、第二には謙遜でなければならぬ。一度びは自分の罪惡に注いだ覺がなくては信仰の門は開かれぬ。一度びは身命を忘れて求めた覺ゆがなくては、信仰の寶玉は與へられぬ。諸君は自ら顧みて如何に感するや。

今言

前田利家

百目木劍虹

第三章　少年期

尾濃平原—荒子城—出生—戰亂の世—關東—

西南—中原—品性の陶冶

彌茫たる尾濃大平原の東偏を貫流する庄内川に近く荒子村あり、其地名古屋を距る西南二里愛知郡に屬し、民家多く土壤肥え、嘉禾穰々、鷄鳴閑かに狗兒人に慕かず、壯夫秉耜を秉りて田に耕し、婦女機に依りて布を織る、楚々たる田園の光景は毫も他の村落と擇ぶなきも、思はゞ今より三百餘歲の古、戰雲天を壓し殺氣四方に塞がる戰國時代に當り、熱誠眞執なる一偉人前田利家が呱々の聲を此地に擧げて、徐に彼が波瀾あり光榮ある六十年の生活の長途を發せむとは、

利家の祖父藏人利成始め源左衛門尉とぃす、永正五年(一五〇八)十一月十三日卒し、彼が父縫殿助利春次て荒子城に主となり、虎視耽々たる豪族の間に介立す、既に城主と云ふ直に勢威の堂々を思はしむるも、說くが如く幾多群小武夫割據の時なり、勢ひ其領廣からす威望隨て重きを得す、

前田藏人殿二千貫の御家、今程は五千石計の御知行の由大納言樣も豐閤も御申候(利家夜話)

吹けは飛ばむとする些々たる二千貫の端下領、以て幾何の士卒を養ひ幾何の粮を蓄へ得べき、而して其據る所の城廓は如何

荒子城あらこむら民居の西北の隅にてあざ名を大中脇といふ處にあり、民居となりて舊址四至定かに見さはめかたけれと、北面に堀形今も殘りて此あたりの地を古城といふ也、其地今爲陸田と府志にあれは彼書選述の頃までは島所なりつらむを今はすべて百姓屋敷となれり、舊記に城墟東西三十八間南北二十八間在于邑之西北ともあり云々(尾張志)

何ぞそれ小なるの甚しき、然れとも現模の小なる必しも一荒子城に限らむや、其郡内に存在せし諸城を見るに、星崎城は南北三十四間東西二十六間なりしなり、平針城は東西三十四間南北三十一間餘なりしなり、島田城は稍大なり而も尙ほ東西四十二間南北百一間に過ぎざるなり、尺寸の地を領し此の如きの城に據る當時の所謂城主なるものゝ、狀態略ぼ察するに難からさるなり、

利春竹野氏を迎ゑて妻とし、六男二女を生む、長は利久藏人と稱し、次は利玄三右衛門と名け第三子安勝五郎兵衛と云ひ第四子は即ち利家なり天文七年(一五三八)十二月二十五日を以て生れ、名を犬千代と命す蓋し其干支戊戌に當ればなり長して孫四郎と呼びまた又左衛門と改む、信長より四歲の弟にして秀吉にはまた二歲の弟に當り、家康に比しては四歲の長者なりしなり、彼は既に武夫の子として生れたり、小なり

と雖も城主の子たる資望を有せり。夫は適子たる運命を興へさりしを以て、出て丶家を興さゝるへからさるも、城主の子たる彼か資望は其生活の前途に多少の便を與ふる所ありき、而して二千貫の小領主の第四子として利家が受けたる家庭の教育は固より完備を望むへからす、絶て師長の聞くなきを以て推すに恐らく自然の開發に委ねられ特に書を授け武を教ゆるものなかりしならむも、偉材は教育に依て作らるへきにあらす、唯その發達を助長するのみ、而も往々固陋なる教育は偉人を矯めて凡ての徒たらしむることあり、幸か不幸か彼はかゝる憂に遇ふことなく、剪裁かはらず發達を自然に委ねて姿に有爲の材を伸し得たりき　(此章未完)

會報

會頭久我侯爵巡回日記(承前)

名古屋市

◎廿四日　津市を發して名古屋に向ふ、僧俗有志諸君續々停車場に來りて一行を迎へて直に腕車を列ねて大谷派別院に入る、爾後一時大廣間に於て演說會あり、開會の趣旨終るゝと共に本多辰次郎日本宗教の事に付辨せられ第二席百日木智蓮名古屋市民諸君に望といふ演題にて第三席近藤疎賢の演說第四席眞岡湛海宗教問題に付て第五席棚橋一郎宗教に對する所感として演せられ最後に會頭久我侯爵の挨拶ありて閉會を告けたるは午後六時頃にして此日の傍聽者四千餘名と見受けられたり流石は佛教隆盛の地たけありて他に見る事能はさる盛況なりき、演說後茶話會の催ありて有志諸君の熱心なる談話等ありて全く終はりたるは午後八時過なりき、當日の幹旋者は佐々木資淳、平野大宜其他同盟會員諸氏一同盡力せられたるは一行の深く謝する所なり

岐阜市

◎廿五日　名古屋を發して正午岐阜驛に着旅館玉井屋に投ず、演說會場は西本願寺別院にして、院は新に建築せられたるを以て頗る宏壯なりき、午後一時開會第一席本多辰次郎第二席城井一秀第三席百目木鏈第四席安藤嶺丸第五席眞岡湛海第六席棚橋一郎にして辨士の多き聽衆の多き巡回中第一等の盛會なりし、最後に會頭の挨拶終りて閉會を告けぬ、散會後一同車を列ねて懇親會場寒松樓の向ふ樓は稻葉山下にありて最も景色に富む所なれとも、惜むらくは暮色已に收さりて觀望を恣にする能はさるを、座定まるや會頭の謝辭あり次て有志諸君數番の演說ありて同盟會支部設立の議喧嘩の間に成立せり、それより杯酒獻酬の裡歡を盡くして散會せしは午後九時頃、宇佐美管事佛教青年會の諸氏數十名幹旋せられたるは深く謝する所なり

大垣

◎廿六日　會場も宿泊も大派別院にして午後例の如く演說會ありて第一席百目木智蓮第二席城井一同第三席眞岡湛海第四席棚橋一郎第五席本多辰次郎右順次終りて會頭の挨拶と共に散會せしは午後四時頃、それより懇親會ありて一行之に臨む出席者百八十名餘にして非常の盛會なりき、同盟會設立の事を托して各談笑の裡散會せしは午後八時、大垣の管事岡田諦賢氏は最も盡力せられたるは深く謝する所なり

揖斐

◎廿七日　朝大垣を發して揖斐町に向ふ里數約五里、今回巡回中尤も行程の困難ある所なりし、正午會場に着す、晝飯後例によりて演說に移る百目木、城井、本多、順次に演了し、次て會頭の挨拶あり、右終りて同所に於て茶話會を開きたるを以て、會頭以下一行之に臨む、明朝西尾に向ふ約あるを以て匆々茶話會を辭して再び大垣に還り、停車場前安井屋に投ず、此日盡力せられたるは盟會員諸氏數十名にして一行の深く奉謝する所なり

西尾町

◎廿八日　朝一番の大垣發の列車にて、安城驛に下車す、木村郡長を始め有志諸君出迎せられたり、曾時休息の後腕車を列ねて西尾町に向ふ、途中有志の出迎ひせらるゝもの甚た多し、西尾の入口に到る頃煙火數發歡迎の意を表されたり、鈴木町長の家を以て休憩所に宛てらる、演說會場は說教場にして善男善女堂外に溢る、午後一時開會の趣旨了ると共に第一席百目木智蓮第二席城井一秀第三席本多辰次郎順次演了最後に會頭の挨拶終りて茶話會あり一行之に臨む、今夕夜行列車にて歸東に就くを以て十數分間にて茶話會を辭し宿に還り晩餐終ると共に有志數名に送られて岡崎停車場に向ひ、會頭一同列車に搭して歸東に就く、獨り本多氏は一行に分れて郷里津島に歸りぬ、西尾に於ける幹旋者は如左

山背俊雄、泉慧嶽、杉浦、中村、味岡、井上、水野、深谷、藤田、藤浦、一ノ瀨、沉藤並に木村郡長、寺田縣參事會員鈴木町長等にして本會の厚く謝する所なり(以上東海道筋丁)

右能州巡回中偶能登灣を過く、船中少閑を得て胸中の記憶を呼起して之を認む

三月廿日風烈しく波怒るの時　(北國丸にて)

會頭久我侯爵一行貴地方巡回の節は懇切なる歡迎を辱うし感銘の至に不堪候不取敢紙上を以て御禮申上候也

四月　大日本佛教徒同盟會

鯖江、福井市、三國、大聖寺、小松、金澤市、富山市、魚津、入善、滑川、高岡、出町、石動、羽咋、能登部、七尾、飯田、輪島、津島(尾州)知立(三河)

有志諸彥御中

新刊紹介

◉文藝界　第一號　日本橋　金港堂

昨年末より發行の計畫にをさ〳〵怠りなかりし雜誌文藝界は、いよ〳〵文學士佐々醒雪君を仙臺より拉し來りて主筆の任に當らしめ、去月十五日を以て其第一號を出せり、評論あり小說あり閑藻あり紙數殆んと四百に充ち、當代知名の文士論。を揃へて光彩を添へ、評論筆の極めて着實にして傾植すへきは「帝國文學」のそれに似、小說閑藻以下の頗る興味あるは「新小說」のそれに似、恰も此二雜誌を合したらんか如き体裁の好雜誌なり、今の世文藝の雜誌少からす、然も多くは時流に投するに汲々し俗受を本として野卑淺薄に陷ゐるの弊あり、醒雪君此に見るあり讀者を導きて趣味を高尚にし理想を高めしむる抱負を以て之れに認むは、特に予の慰を得たるものなり、幸に鋭意勉め、我か寂寞たる文壇を賑はすに怠る勿れ(白洋)

鑛毒被害民救濟義捐金第四回報告

一金五十錢　弘前生玉慈照殿
一金二十錢　長崎花田了殿
一金六十錢　横濱藤尾種子殿
一金二十錢　越後柳澤巖殿
一金一圓　美濃山本某殿
計金二圓五拾錢
累計金四拾六圓八錢

◎元中尾事北村と改姓す

北村教嚴

第十一回釋尊降誕會

例年の如く四月八日正午神田錦輝館に於て第十一回釋尊降誕會を開き左の辯士出演せらる

南條文雄君　村上專精君
近角常觀君　齋藤唯信君
（他は未定）

右了りて同館樓上にて茶話會を催し餘興として狂言、講談、琵琶、劍舞等有之候特別茶話會券希望の方は金廿錢を添へて本會に申込るへし

四月　本郷森川町一番地新坂通
大日本佛教青年會

家庭

▲一部八錢▲六部四十二錢▲十二部八十錢（郵税不要）

◉同情の本源（近藤純艶）◉春の小村にきて（雨翠）◉栽ぬの家庭（大須賀秀道）◉茶道論（浜波紫紋）◉梨の花（荻洲）◉鷄の飼ひ（畑つち子）◉手輕調理法（しづか）◉春風吟（清水しゅく）◉養（土井生）◉家庭日記（鯉井雪子）◉少女（花子）◉女子の職業（安達照一）◉白魚の料理（大橋久子）◉訪づれの記（社業）◉愛犬エス（ゆめ坊）◉歸雁（桑田ミしゑ）◉家庭（夜模範と道徳）◉をちこの春（四明）◉曙光（春の屋みどり）◉主義（北斗）◉柳の歌（藤島ふち子）◉心界百話（今井昇道）◉心界百首（藤廼金道）◉袱紗の縫方（木村冥子）◉花束（てる子）◉東京だより◉支那だより◉新刊紹介

▲第二卷第四號▼

眞の人

全一冊　表紙裝幀優麗　定價三十六錢　郵税金六錢

家庭社同人著

佛教的國家を造らんとする人、佛教的家庭を爲らんとする人、佛教的人民を造らんとする人は少くとも一讀すべきものにして教育家、宗教家殊に佛教の說教家、演說家、教誨師等諸師の須臾もはなすべからざる寶庫あり。

注文所　東京市森川町一番地　家庭發行所

◎◎新刊◎◎

文學博士　村上專精師述

眞俗二諦辨

全一冊

●定價一冊金拾三錢郵税不要、但切手代用一割增

本書は村上文學博士か眞俗二諦の義に付き、極めて平易に、極めて通俗に、極めて明瞭に述べられましたもので、眞俗二諦と云へば誰れしもよく承知し居る事なれども、佛教の本旨を尋ぬれば、眞俗二諦の說より外はありません、眞俗二諦と一口に云ふものゝ、實は八萬四千の法門皆之に包まれて居ると申しても宜し、去は各宗各派の教法は悉く眞諦俗諦の二門を開いて弘通したるに過きないものであります、

先づ本書ははじめに眞俗二諦の語を應用するに至りし濫觴を述べまして、眞俗二諦に對する一般の概念を與へ、次に聖道門諸宗に亙り、次に眞宗一家に限る眞俗二諦を辯ずること、縷々として盡きざるの感あります、其間諸經を引用して證となし、例を擧けて說明を容易ならしむる等用意周到、少しも遺憾なきものは本書であります、

宗教家は勿論佛教信者たる者は、必ず本書を一讀せられんことを望みます、

東京市本郷區森川町一番地
大日本佛教徒同盟會出版部

文學士　清澤滿之師序
文學士　近角常觀君著

信仰の餘滴

再版

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵税不要●郵券代用一割增

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをすゝむ、

一、宗教的同朋。
二、活ける懺悔。
三、外柔にして、內、剛なるべし。
四、聲をきくべし、光を見るべし。
五、我を捨てゝと欲すれは捨つる能はず。
六、佛の人格。
七、地を固く踏めされを常に歩を進めよ。
八、信界に於ける監獄。
九、詩的信仰は一種の僻慢界なり。
一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
一一、因果應報は宗教的自覺なり。
一二、相對世界の眞相。
一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
一四、佛陀を近きに求めよ。
一五、信念に修養は實際問題に如くなし。

東京本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部

政教時報第七十六號　明治三十五年四月一日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
毎月二回一日十五日發行

菅公千年祭の紀念

大須賀秋峯君著

菅公奉佛傳

菅公が熱心な佛教信者であつたことを明確に世に知らせた新著なり之を讀めば南無觀世音菩薩を常に唱へ又佛弟子道眞と自ら名乗られて公の人物は忽ち眼前に躍り現れる加之是に由つて公が政治家としても忠臣孝子としても學者詩人としても佛教徒の理想的人物たることを知らむ而も流麗の筆、明確の論必ず公を慕ふ國民が菅公千年の紀念として一讀せんことを望む

◎三月二十日
◎全一冊美裝
◎定價貳拾錢
◎郵稅四錢

申込所　京都東六條中珠數屋町　法藏館

佛教國民の必讀書

佛教と國家

文學博士南條文雄師題辭
故總持寺貫主畔上梅仙師題辭
貴族院勅選議員秋月新太郎君序
警醒叢誌主筆田島機居士著

全一冊　定價十二錢　郵稅二錢

社會國家に對し從來わが佛教がその如何に影響し如何に貢献せし屈あり印度支那日本にわたり或はしかを汎く政治より藝術文學より或は殖産興業其他あらゆる方面より明確なる歴史的證據を糺査し來りて縱横論議せるもの活佛教の價値世に認められすさる時苟も國家を談ずるに必ず政教問題の末た解光せられ來有益なる材料を與ふる近精確豐富なる一大快書なり

南軒　富井隆信師著

他力のおしへ

正信偈講演

全一冊　定價卅錢　郵稅四錢

本書は富井隆信師、眞宗の教義を解らせる爲め、正信偈に就いて講話せられたもので、先づ阿彌陀如來の本願の成就から、尊說教の本意を叙べ、三國七高僧の御教化を逐一に擧げて、眞宗の肝要、念佛の奥儀、之を讀めば一目瞭然と解る加之、師が尋意なる輕妙流麗の筆を揮ひ坐して物語るが如く、新因線をも雜へ、譬喩をも加へ、誰れでも有難く而白く讀まれる樣に、最も平易に書かれたれば、眞宗の信徒たるものは必ず之を一讀して、親鸞聖人の精神を知つて下されい。特に布教家の最も斯新で進歩した良參考書たるは申すまでもない。

賣捌所　京都　法藏館
東京　文明堂

發行所　大日本帝國教育會出版部